

北海道指定史跡

**シブノツナイ 竪穴住居跡**

**発掘調査概要報告書（2020年度）**

史跡内容確認のための調査

湧別町教育委員会

2021. 3

## 例 言

1. 本書は令和2年度に湧別町教育委員会が実施した、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆・写真撮影・写真図版作成は湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館の林勇介が担当した。
3. 遺跡位置図、竪穴住居跡分布図など挿図は任意縮尺とし、各図にスケールを配置した。
4. 調査の記録及び出土資料は、湧別町教育委員会で保管する。
5. 土層の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編1967、33版2010年）による。
6. 基準点測量及びトータルステーションシステム・遺跡管理システムなどの測量機材の借用、測量機材操作指導については株式会社シン技術コンサルに委託した。またデータ入力作業、ドローンによる現地撮影などの協力を得た。
7. 発掘調査・整理報告にあたり、下記の諸機関及び個人から、ご指導・ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、湧別町農業協同組合

熊木俊朗、佐藤和利、岡孝雄、西脇対名夫、村本周三、内田和典、種石悠、鈴木舞、坂本尚史、柳瀬由佳、武田修、松田功、合地信生、平河内毅、三浦一輝、八重柏誠、森久大、今泉和也

# 目 次

例言

目次

1. 調査の概要	1
(1) 調査目的	1
(2) 調査要項	1
(3) 調査体制	1
(4) 調査にいたる経緯	1
(5) 過去の調査	2
2. 遺跡の位置と環境	2
(1) 湧別町の地理と遺跡	2
(2) シブノツナイ竪穴住居群の立地	4
(3) シブノツナイ竪穴住居群の概要	4
3. 調査の方法と成果	4
(1) 調査区の設定	4
(2) 基本層序	7
(3) 発掘調査成果（概要）	7
4. 普及活動	8
5. 成果と課題	8
(1) 竪穴住居群の年代と内容	8
(2) 今後の調査	8
引用・参考文献	9
報告書抄録	10
写真図版	11

## 1. 調査の概要

### (1) 調査目的

北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の保護及び活用を進めるため、平成30年度から湧別町では発掘調査を実施している。具体的な調査の目的は、遺跡の正確な範囲や遺構の年代など内容詳細を明らかにすることである。今年度の調査目標は大型の竪穴住居跡の年代や内容を把握することとし、発掘調査で次の2点を試みた。1点目はカマドの検出、2点目は竪穴住居跡の年代が特定できる資料および試料の収集・採取である。

### (2) 調査要項

調査対象	湧別町シブノツナイ竪穴住居群 (I-21-35) 北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」(昭和42年3月17日指定)
所在地	紋別郡湧別町川西499-1・2, 502-1・2, 503, 714, 717～720, 722-1～3, 930, 1056, 1059-1番地
対象面積	139,462㎡
発掘面積	17.3㎡
発掘期間	令和2年7月16日～8月12日
整理期間	令和2年8月13日～令和3年2月28日

### (3) 調査体制

調査主体者	湧別町教育委員会 教育長 阿部 勉
調査事務局	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館 館長 中島 一之 管理担当 中原 明生、小山 義幸
調査担当者	主任 林 勇介
調査補助員	地域おこし協力隊 増田 久美子
発掘作業員	大津 淳子、栗田 豊、野上 弘幸、茂手木 政則

### (4) 調査にいたる経緯

北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」は、平成26～29年度に北海道教育委員会(以下、道教委)が実施する重要遺跡確認調査の対象となり、北海道立埋蔵文化財センターの指定管理者である公益財団法人北海道埋蔵文化財センター(以下、道埋文)によって測量・発掘調査が行われた。調査報告書では今後の調査に求められる諸課題が示された。

道教委が平成28年度から開催している「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」(以下、懇談会)では、道埋文が実施しているシブノツナイ竪穴住居跡の調査が取り上げられ、有識者によって意見交換が行われている。平成28年9月15日には平成28年度第2回懇談会が湧別町を会場として開催され、史跡保全のための意見交換やシブノツナイ竪穴住居跡の現地視察が行われた。

重要遺跡確認調査に関する道教委・道埋文・湧別町教育委員会(以下、町教委)の協議や懇談会において、町教委が主体となった長期的な調査が行われることが提案されてき

た。町教委はその状況を踏まえ、主体的にシブノツナイ堅穴住居跡の保護を進める必要があると判断し、平成30年度から発掘調査を実施している。

7月22日には令和2年度第1回懇談会が湧別町で開催され、町教委が進めている調査についての意見交換と、実施中であったシブノツナイ堅穴住居跡の発掘調査の現地視察が行われた。懇談会及び現地視察では調査を進めるうえでの重要な指摘を数多く受けることができ、今後の課題を整理するための貴重な機会となった。

## (5) 過去の調査

シブノツナイ堅穴住居群は昭和3年には郷土史研究家にその存在が知られており、昭和30年代から研究者の協力を得て発掘調査が行われてきた。平成30年度からの町教委の調査を含め、発掘調査はこれまでに4度行われている。その履歴は次のとおりである。

調査時期	調査主体	備考
昭和38年	湧別町教育委員会	堅穴住居跡3基（A、B、C堅穴）を発掘。
昭和41年	湧別町教育委員会	堅穴住居跡2基（238、318号）を発掘。
平成26～29年	（公財）北海道埋蔵文化財センター	測量図（堅穴分布図）の作成。堅穴住居群の北側平坦地に6か所のトレンチを設定し、発掘。
平成30年～	湧別町教育委員会	平成30年度は堅穴住居群の北側平坦地に2か所トレンチを設定し、発掘。 平成31年度は堅穴住居群の北側平坦地に1か所、431号堅穴に1か所トレンチを設定し、発掘。

## 2. 遺跡の位置と環境

### (1) 湧別町の地理と遺跡

湧別町はオホーツク海に北面し、東はサロマ湖を囲む佐呂間町と北見市（旧常呂町）、西はシブノツナイ川を挟み紋別市、南は遠軽町と接している。町の中央部には湧別川による沖積平野が広がり、明治30年には屯田兵入植による開拓が行われ市街地が形成されてきた。湧別川は裏大雪山系の山並みの一つである天狗岳付近に水源を発し、北東に流れをとりながら山間を抜け遠軽にいたる。そこで生田原川と合流し川幅を広げ、流れの方向を若干北に変え、湧別の町を貫流しオホーツク海に注ぎこんでいる。オホーツクの川に注ぎこむ河川としては、常呂川に次いで大きい。上流域である遠軽町白滝市街地の北方8km地点には国内最大規模の黒曜石原産地である赤石山があり、黒曜石は湧別川を河口まで流れ、それを素材とした石器が町内で広く確認される。

町内には旧石器時代からアイヌ文化期まで幅広い年代の遺跡が確認されており、その数は現在56か所となっている（図1上）。それらの情報は道教委・町教委が管理する埋蔵文化財包蔵地調査カードに記載・公開されているほか、詳細な位置や内容については北海道教育委員会文化財・博物館課のホームページにある『北の遺跡案内』や湧別町のホームページで確認できる。

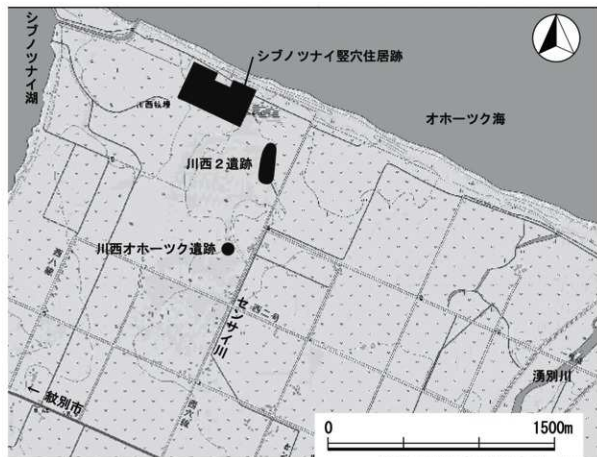


図1 北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」位置図

## （2）シブノツナイ竪穴住居群の立地

シブノツナイ竪穴住居群は北海道紋別郡湧別町川西499-1ほか、湧別町および国が所有する牧草地に所在し、東は湧別川と支流のセンサイ川、西はシブノツナイ湖に挟まれた低平な舌状台地の先端部に位置している（図1下）。竪穴住居群が立地する舌状台地は標高4～5mほどで、周囲にはセンサイ川および湧別川によって形成されたと考えられる河跡沼や湿地帯が標高2.5m以下の範囲に広がっている。

竪穴住居群の北側には海岸線に沿って形成された砂丘列があり、周囲にはハマナス、ハマニク、ハマエンドウ、シロヨモギの群生が見られ、南西側にはミズナラ、カシワを主体とする保安林が広がっている。低湿度ではヨシやスゲ類が茂り泥炭が形成されている。シブノツナイ竪穴住居群やその西部のシブノツナイ湖にも見られる「シブノツナイ」はアイヌ語を語源としており、「ウグイのいる川」を意味している。

現在、道史跡となっている土地の大部分は町有地であるが、湧別町農業協同組合へ貸し出され、「町営川西牧野」の一部として利用されている。竪穴住居群の南西側には受精施設などの牧野関連施設がある。毎年5月～10月、町内の酪農家が所有する約150頭の乳牛が、月に数日程度竪穴住居群に放牧されている。

## （3）シブノツナイ竪穴住居群の概要

遺跡の特徴は、竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みの状態で残り、密集した状態で地表面から確認できることである。確認できる竪穴住居跡は530基であり、平面形状毎に見ると多いものから方形が326基、円形が176基、多角形が20基、柄鏡形が8基である（図2）。方形が半数以上を占めていることから、主に擦文文化期に形成された竪穴住居群だと考えられる。昭和41年の発掘調査でも方形の竪穴住居跡から擦文土器が確認されている。

## 3. 調査の方法と成果

### （1）調査区の設定

調査に必要な基準点と測量基準杭は、平成27～29年度の道埋文の調査、平成30・31年度の町教委の調査で設定したものを継続して使用した。測量調査杭の名称は「南北ライン-東西ライン」で表され、基準杭北東側の調査区（グリッド）の名称ともなっている。今年の調査区を測量するため、新たに4本の杭（36-13、36-15、38-13、40-13）を設置した。

令和2年度は、422号竪穴と425号竪穴に調査区を設定した（図3）。設定理由は3点ある。

①平面形が方形であることが現地で明確に確認できること。②平面形により擦文文化の住居跡を想定することができ、カマド検出を目標とした調査計画が立てられる。③大半が放牧地となっている史跡内において数少ない非放牧範囲にあり、放牧による調査への影響が少ないこと、である。

一般的に、擦文文化の竪穴住居跡ではカマドは南東方向の壁で確認される傾向がある。本遺跡でもその例に該当することを想定し、調査区は竪穴住居跡の中心から東及び南方向の各壁に向かって0.5m幅で設定した。調査区内でカマドが確認されなかった場合は、東方向に設定した調査区を南側に拡張して対応する計画とした。

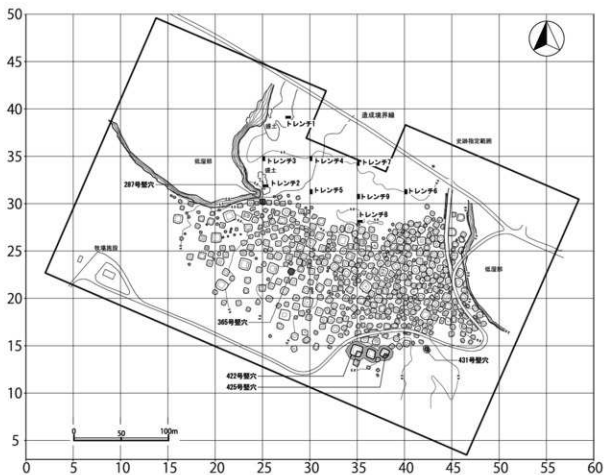


図2 シブノツナイ壁穴住居群 壁穴住居跡分布図 (1:4000)

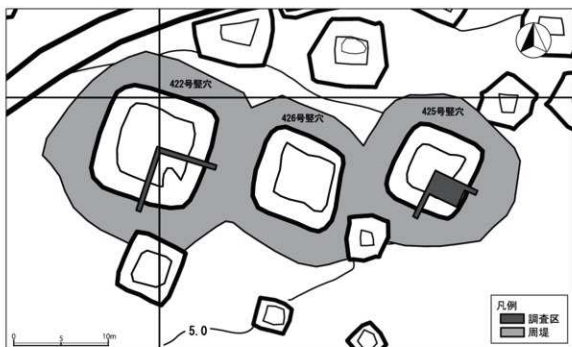
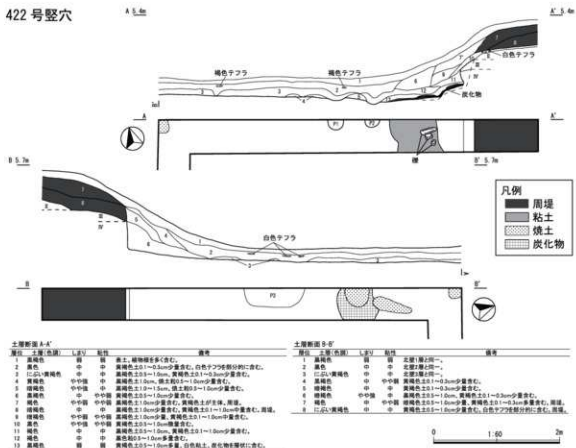


図3 422号・425号壁穴周辺平面図 (1:400)



## 422号堅穴



## 425号堅穴

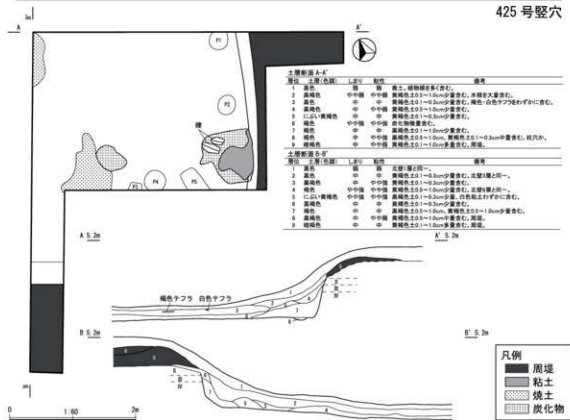


図4 422号・425号堅穴土層断面・平面図(1:60)

## (2) 基本層序

シブノツナイ竪穴住居群で確認されている基本層序は、以下のとおりである。

- I層 表土。笹の根が密に入り込んでいる。
- II層 黒色土。層厚10～20cmの腐植土層。統縄文文化期の遺物包含層。
- III層 黒褐色土。腐植土。やや粘性がある。
- IV層 暗オリーブ褐色。漸移層。
- V層 黄褐色粘土。しまりが非常に強い。
- VI層 にぶい黄橙色粘土。しまり、粘性が非常に強い。

## (3) 発掘調査成果 (概要)

**方法** 掘削は、表土はスコップ、竪穴埋土は土層の変化に注意しながら層位ごとに移植ごとで進めた。遺物は、床面出土及び出土位置が重要と考えられるものは位置を計測し、その他は層位ごと一括して取り上げた。埋戻しは後年の検証調査等を想定し、床面から埋土を詰めた土のうを敷き詰めた。ただし、表土分については不織布を敷いた上から土を直接戻した。調査地が保安林内であることから、北海道オホーツク総合振興局産業振興部林務課に掘削の許可を得る際に指示を受けていたためである。

【422号竪穴】(図4)

**形状と規模(測量図上)** 方形、10.8×10.7m、概算面積115.6㎡

**土層** 竪穴はIV層を掘り込んで構築されており、床面直上にはにぶい黄褐色土、その上には黒色土が広く堆積する。この黒色土の一部で白色及び褐色のテフラが斑状に確認された。南壁付近では、壁の崩壊や周堤土の流れ込みによると思われる三角堆積が確認された。東壁付近では、カマドの痕跡と考えられる白色粘土等の堆積が確認できた。壁の外側には堀上げ土による周堤が確認できた。

**付属遺構** 調査区東部壁際の床面直上で白色粘土と炭化物が面状に広がり、その上部に礫が数点確認された。検出位置と状況からカマドの痕跡と考えられる。ただし、袖、天井、煙道は調査区内や土層断面では確認できていない。そのほか、柱穴を2基(P1・2)、用途不明の土坑1基(P3)、焼土分布4か所、炭化物分布1か所を確認した。

**出土遺物** 土器は、白色粘土層の下に潰れたような状態で出土した。破片点数は約100点におよび、現在整理作業中であるが文様の違いにより小型の甕が2個体分程度あると考えられる。胴部文様帯は4本前後の沈線により菱形文が描かれたものが多く、上端には刺突列、下端には横走沈線が見られる。カマド奥の壁際では甕の底部2個体分が出土している。土器以外では床面や周堤土中から紡錘車が出土している。石器は、黒曜石製の剥片がカマドの手前に1点認められたが、それ以外にはほとんど確認できていない。

**時期** 出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

【425号竪穴】(図4)

**形状と規模(測量図上)** 方形、9.5×8.2m、概算面積77.9㎡

**土層** 竪穴はIV層を掘り込んで構築されており、床面直上には褐色土、その上には黒色土が広く堆積する。この黒色土の一部で白色及び褐色のテフラが斑状に確認された。東および南壁付近には、壁の崩壊や周堤土の流れ込みによると思われる三角堆積が確認された。壁の外側には堀上げ土による周堤が確認できた。

**付属遺構** 初めに設定した調査区ではカマドが検出されなかったため、調査区東部を南側へ2m拡張した。その結果、白色粘土のまとまり、焼土と炭化物が混じる土、礫を確認した。袖や天井は確認できていないが、位置などからカマドと考えられる。そのほか、柱穴を2基（P1・2）、用途不明の土坑3基（P3～5）、焼土分布2か所、炭化物分布1か所を確認した。

**出土遺物** 床面直上の遺物は10点に満たず、竪穴埋土から遺物の出土も僅かであった。遺物のほとんどが小さな擦文土器片である。小型甕の胴部片には、3本単位の沈線による斜格子文がみられる。石器は黒曜石製の剥片が1点認められた。

**時期** 出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

#### 4. 普及活動

例年、地域の教育関係者に対して発掘調査の実施を周知し、現地見学を希望する場合は解説を実施している。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により実施しなかった。11月28日土曜日には町教委主催の発掘調査報告会も予定していたが、新型コロナウイルス感染症が拡大状況にあったため実施を見送った。

現地見学会や発掘調査報告会は埋蔵文化財の価値や保護する意義を知ってもらう重要な機会であり、開催できなかったことの教育普及活動上の損失は極めて大きい。例年以上に刊行物等で調査成果を紹介し、発掘調査の情報発信に努めた。

#### 5. 成果と課題

##### (1) 竪穴住居跡の年代と内容

調査目標とした2点、①カマドの検出、②竪穴住居跡の年代が特定できる資料および試料の収集・採取、ともに達成することができた。これらにより、2基の竪穴住居跡が擦文文化後晩期のものであることが確認できた。採取した炭化物の年代測定や、土壌フローテーションによる動植物遺存体の選別・分析は次年度以降に行う予定である。これらの自然科学分析を行うことで、より詳細な竪穴住居跡の年代や季節性などの把握が期待できる。

このほか、調査で色調の異なる褐色、白色の2種類のテフラが確認できた。昨年度の調査や川西2遺跡の調査でもテフラが確認されている。遺跡の形成過程や年代を把握するためにも、同定作業を行う必要がある。また、環境復元も視野に入れた周辺の泥炭分析など低湿地での調査も重要だろう。

##### (2) 今後の調査

次年度も今年度と同様の方法と規模で大型竪穴住居跡の発掘調査を行う予定である。この調査は、道教委の懇談会で議論された内容や道理文の発掘調査成果を参考に、町教委が計画してきた。次年度から、町教委でシブノツナイ竪穴住居群調査検討委員会（仮称）を設置し、調査計画や内容の妥当性を委員の方々に検討してもらいながら、本竪穴群の特徴の明確化と保護環境の強化を進めていく予定である。

## 引用・参考文献

### 報告書等

- 網走市立郷土博物館 1990『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第4集「オホーツク沿岸の遺跡」』  
北海道立埋蔵文化財センター 2015『重要遺跡確認調査報告書第10集』  
2016『重要遺跡確認調査報告書第11集』  
2017『重要遺跡確認調査報告書第12集』  
2018『重要遺跡確認調査報告書第13集』  
2019『重要遺跡確認調査報告書第14集』  
2020『重要遺跡確認調査報告書第15集』
- 湧別町教育委員会 2019『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査報告1』  
2020『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書(2019年度)』
- 青柳文吉編 1995『北方民族博物館調査報告 湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館  
大場利夫 1965『湧別町古代史』『湧別町史 湧別町』  
1966『湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』湧別町教育委員会
- 熊木俊朗 2016『擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動・大島2遺跡の研究(1)』  
東京大学常呂実習施設研究報告第14集 東京大学大学院人文社会系研究科付属北海  
文化研究常呂実習施設
- 米村喜男衛 1961『川西遺跡調査報告』網走郷土博物館シリーズ 網走市立郷土博物館  
米村喜男衛 1981『北海道紋別郡湧別町川西遺跡』『北方郷土・民族誌』3 北海道出版企画センター  
米村哲英 1963『北海道紋別郡湧別町川西シブノツナイ遺跡調査概報』湧別町

### 論文等

- 大沼忠春編 2004『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
- 熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター
- 小崎尚・野上道男・小野有吾・平川一臣編 2003『日本の地形2 北海道』東京大学出版会
- 榎田朋宏 2016『擦文土器の研究』北海道出版企画センター
- 塚本浩司 2002『擦文土器の編年と地域差について』『東京大学考古学研究室研究紀要』17 東京大学  
考古学研究室
- 長尾捨一 1962『5万分の1地質図幅説明書「中湧別」』北海道開発庁
- 中田裕香 2016『大場利夫と竪穴群』『北海道考古学』第52輯 北海道考古学会
- 藤本強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会
- 本間源治 1928『湧別沿岸紀行』『郷土研究』創刊号 北見郷土研究会
- 町田洋・新井房夫編 2003『新編 火山灰アトラス - 日本列島とその周辺』東京大学出版会
- 横山英介 1990『擦文文化』ニュー・サイエンス社

## 報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうしていしせき しぶのつないたてあなじゅうきよあと ほくつちようさがいようほうこくしょ (2020ねんど)							
書名	北海道指定史跡 シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書(2020年度)							
副書名	史跡内容確認のための調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	林 勇介							
編集機関	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRT・郷土館							
所在地	〒099-6325 北海道紋別郡湧別町北兵村一区588番地 TEL01586-2-3000							
発行年月日	西暦2021年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
シブノツナイ 竪穴住居群  道指定史跡 シブノツナイ 竪穴住居跡	北海道紋別郡 湧別町川西 499-1・2,502-1・ 2,503,714,717 ～720,722-1～ 3,930,1056,1059- 1	15598	1-21-35	44° 14' 40.14"	143° 34' 32.56"	2020.7.16 ～.8.12	17.3㎡	史跡保護のための詳細分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湧別町 シブノツナイ 竪穴住居群 (北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡)	集落跡	縄文文化期 弥生文化期	窪みで残る竪穴住居跡が530か所。 竪穴は4～7m規模の方形を呈するものが主体であるが、10m前後の大型のものが15か所見られる。		擦文土器、紡錘車		大型竪穴住居跡2基でトレンチ調査。	

図版1



1 シブノツナイ竪穴住居跡遠景（南東から：夏）



2 シブノツナイ竪穴住居跡遠景（南東から：春）

図版 2



1 422号竪穴調査区完掘（北から）



2 422号竪穴カマド（西から）



3 422号竪穴カマド周辺土層断面（北壁）



4 422号竪穴遺物出土状況（北西から）

図版3



1 422号竪穴北壁土層断面



2 422号竪穴西壁土層断面



3 422号竪穴北壁土層断面 周堤部



4 422号竪穴作業風景（東から）



5 425号竪穴調査区完掘（北西から）



図版 3



1 425号竪穴北壁土層断面



2 425号竪穴西壁土層断面



3 425号竪穴カマド (西から)



4 425号竪穴調査風景



1



2



3

5 422号竪穴出土遺物 (1・2は甕、3は紡錘車)

北海道指定史跡  
シブノツナイ竪穴住居跡  
発掘調査概要報告書（2020年度）

史跡内容確認のための調査

発行年月日 2021年3月20日

編集・発行 湧別町教育委員会

〒099-6325北海道紋別郡湧別町北兵村一区588

湧別町ふるさと館 JRY・郷土館

電話 (01586) 2-3000

印刷 北湧印刷

北海道紋別郡湧別町緑町99番地